様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月　４ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１１３６２

研究課題名（和文）エリート・パラスポーツの功罪の検討―パラスポーツを通した共生社会の成熟に向けて

研究課題名（英文）Examining a paradox of elite parasports: Towards the promotion of an inclusive society through para-sport

研究代表者
内田　若希（Uchida, Wakaki）

九州大学・人間環境学研究院・准教授

研究者番号：３０４５８１１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：東京パラリンピック観戦者は、観戦しなかった者と比較して、身体障害者およびパラアスリートに対するイメージが良好なのか、および身体障害者との交流場面における当惑や抵抗感が少ないのかを検討した。その結果、東京パラリンピックをテレビなどで観戦した者は、観戦しなかった者と比較して、身体障害者およびパラアスリートに対してポジティブなイメージを有し、かつ身体障害者との交流態度が良好であることを確認した。一方で、東京パラリンピックの観戦の有無に関係なく、身体障害者に対するイメージよりパラアスリートに対するイメージが良好で、両者の間に乖離が認められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで、障害者と健常者がともに生きる公平な社会の構築に向けて、偏見や差別の背景に存在する障害者に対する態度の検討が重要となること（栗田・楠見，2014）や、障害者に対する交流態度のポジティブな変容の喚起が、パラリンピックの成果として問われること（Hughes，1999）が指摘されてきた。共生社会の推進に向けて、東京パラリンピックの観戦が身体障害者イメージや身体障害者に対する交流態度とポジティブに関連することを提示しただけでなく、共生社会の推進に逆効果となる可能性にも言及した本研究は、パラリンピックの功罪を多面的に検討したという点において意義がある。

研究成果の概要（英文）：The main purpose of the present study was to examine the perception of individuals with physical disabilities and para-athletes, as well as attitudes about interactions, depending on whether respondents watched the Tokyo 2020 Paralympic Games.We found that people who watched the Paralympic Games had a more positive perception of individuals with physical disabilities and para-athletes compared with those who did not watch the games. Additionally, people who watched the games were less reluctant regarding interactions with individuals with physical disabilities. The perception of para-athletes was more positive than the perception of individuals with physical disabilities regardless of whether people watched the games or not.

研究分野：アダプテッド・スポーツ科学

キーワード：身体障害者　イメージ　交流態度　パラリンピック・パラドックス　東京パラリンピック

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

身体は、性別、年齢、障害・疾病、体質や身体能力など、あらゆる情報を提示し、それによって人間を分類する道具となりうる（後藤，2007)。たとえば、身体障害に着目すると、何らかの身体障害の有無に基づき、「障害のない身体」を有していれば健常者に、「障害のある身体」を有していれば身体障害者に分類される。しかし近年では、多くの先行研究において、両者の境界線を取り除き、共生社会の実現に資するパラスポーツの意義が示されてきた。人間は、何らかの共通項があることで、心理的な共通のアイデンティテイを形成することができるため（栗田，2015)、パラアスリートが発揮する高いパフォーマス能力は、健常者が有していない「障害のある身体」ではなく、健常者も有している「スポーツを行う身体」に視点が移行することによって、身体障害者と自分たちとの同質性や共通性に気づくことを可能にすると考えられる。

一方で、パラアスリートが有する「障害のある身体」と「スポーツを行う身体」の二面性の間に矛盾が生じ、共生社会の推進に逆効果となる側面も存在する。Brett & Bundon (2017) は、パラリンピックなどで活躍するようなパラアスリートが有する「高いパフォーマンス能力」に注目が集まるほどに、彼ら・彼女らの「障害」の存在が希薄になり、重度の身体障害者が社会的・心理的・文化的に排除されることを懸念している。また、我が国における障害者を取り巻く現状をみると、物理的・制度的な障壁を除去・改善するための施策が行われ、「障害のある身体」を有する人々が社会に受容されるようになってきた。しかし、その一方で、それは表層的な変化に過ぎず、彼ら・彼女らに対する回避的行動や攻撃などの差別は現在も残存したままであることが指摘されている（栗田，2015)。

我が国では、東京 2020 パラリンピック競技大会（以下、東京パラリンピックとする）が 2021 年に開催され、本大会を通じて、障害者に対する理解の向上や共生社会の推進を期待する声は大きかった。しかし、東京パラリンピックを通して、高いパフォーマンス能力を発揮するパラアスリートの「スポーツを行う身体」に健常者が着目することでそのイメージが改善したとしても、身体障害者との交流場面における態度がネガティブなままならば、真の意味での障害理解や共生社会の成熟にはつながらない。

パラアスリートが有する「スポーツを行う身体」と「障害のある身体」の二面性が提示する問題は、共生社会の実現を阻害する可能性がある。共生社会の実現に向けて、わが国における「エリート・パラスポーツの功罪」を明らかにし、どのように解決するのかを検討することが、本研究課題の核心をなす学術的問いである。

２．研究の目的

本研究では、「障害のない身体」を有する者（健常者)、「障害のある身体」を有する者（スポーツに従事しない障害者)、および「スポーツを行う身体」と「障害のある身体」の両方を有する者（パラアスリート）の 3 者の視点から、学術的問いを探求する予定であった。しかし、コロナ禍の影響により、研究方法を変更する必要があった。そこで、「障害のない身体」を有する者にのみ焦点を当て、以下の研究目的を遂行した。

まず、東京パラリンピック観戦者は、観戦しなかった者と比較して、①身体障害者およびパラアスリートに対するイメージが良好なのか、および②身体障害者との交流場面における当惑や抵抗感が少ないのか、③身体障害者に対するイメージとパラアスリートに対するイメージには、乖離が存在するのかの 3 点について検討することを目的とした。加えて、④高いパフォーマンス能力を呈示するパラアスリートに対してのイメージが、スポーツをしていない、あるいはできな

い「障害のある身体」を有する人々を含めた交流場面における態度に、ポジティブに関連するのかを検討することも目的とした。

３．研究の方法

1）調査対象者

本研究では、「障害のない身体」を有する健常者を調査対象者とした。「障害のある/ ない」の区別は、身体障害者手帳の保有有無により判断した。ウェブ調査会社（マイボイスコム株式会社）のパネル（モニタ）から調査対象者を募集し、オンライン調査を実施した。調査に際しては、全国に在住の 20 歳から 50 歳代の成人を対象に性年代均等回収を行った。最終的に、有効回答数は 2,394 名（男性 1,137 名、女性 1,250 名、その他 4 名、回答しない 3 名）であった。平均年齢は 41.0±11.00 歳であった。

2）質問項目

(1) 個人的特性要因

性、年齢、東京パラリンピックの観戦の有無、身体障害児・者に対するボランティア経験の有無、身近な障害者の有無、および過去のパラスポーツ観戦の有無について確認した。

(2) 身体障害者イメージ尺度

身体障害者に対するイメージの測定には、身体障害者イメージ尺度（栗田・楠見，2010）を用いた。この尺度は、身体障害者に対するイメージを表す形容詞対で構成され、「社会的不利（7 項目)」「尊敬（6 項目)」「同情（4 項目)」の 3 つの下位尺度で構成される。また、身体障害者イメージ尺度の形容詞対を用いて、パラアスリートに対してのイメージも同様に回答を求めた。なお、各下位尺度得点が高いほど、ポジティブなイメージを有していることを示す。

(3) 交流態度尺度

身体障害者との交流態度を測定するために、栗田・楠見（2010）の交流態度尺度を使用した。この尺度は、障害観尺度（河内，2004）の下位尺度のひとつである「交流の場での当惑（8 項目)」、および抵抗感尺度（河内，2004）の下位尺度である「交友関係（9 項目)」と「主張（9 項目)」の合計 26 項目で構成されている。いずれの下位尺度においても、障害条件を自由に設定できるようになっており、本研究では、「障害のある身体」に主眼を置いているため、「身体障害」を用いた。いずれの下位尺度も、得点が高いほど、身体障害者との交流場面に抵抗を感じていることを示す。

3）統計処理

目的①②を検討するために、身体障害児・者に対するボランティア経験の有無、身近な障害者の有無、および過去のパラスポーツ観戦の有無を共変量として調整し、共分散分析を実施した。つぎに、目的③を検討するために、観戦群および非観戦群ごとに対応のある t 検定を実施した。最後に、目的④を検討するために、構造方程式に基づくパス解析を実施した。

4）倫理的配慮

事前に所属先の倫理委員会による審査を受け、承認を得てから実施した（承認番号 202107)。

４．研究成果

はじめに、東京パラリンピック観戦者は、観戦しなかった者と比較して、①身体障害者および

パラアスリートに対するイメージが良好なのか、および②身体障害者との交流場面における当惑や抵抗感が少ないのかについて検討するために、共分散分析を実施した。その結果、観戦群は非観戦群と比較して、身体障害者やパラアスリートに対して「尊敬」および「同情」においてポジティブなイメージを有し、かつ「交流の場での当惑」および「交友関係」に関する抵抗感が低かった（表1）。

表1．東京パラリンピックの観戦の有無による各下位尺度の合計得点の差異

	観戦群 (N=945)		非観戦群 (N=1449)		*F*
	M	SD	M	SD	
身体障害者に対するイメージ					
社会的不利	22.5	4.94	22.2	5.14	1.80
尊敬	26.4	3.87	25.3	3.34	33.51**
同情	14.9	2.35	14.3	2.64	17.21**
パラアスリートに対するイメージ					
社会的不利	27.2	4.57	27.1	4.17	.03
尊敬	29.9	5.36	28.0	4.65	49.91**
同情	17.6	2.96	16.9	2.55	23.46**
身体障害者との交流態度					
交流の場での当惑	27.6	6.94	29.0	7.05	5.54*
「交友関係」に関する抵抗感	22.8	7.55	25.0	7.80	17.69**
「主張」に関する抵抗感	27.3	6.74	28.0	7.08	.17

Note．各下位尺度の最高得点は、社会的不利で49点、尊敬で42点、同情で28点、交流の場での当惑で48点、「交友関係」に関する抵抗感で54点、「主張」に関する抵抗感で54点

$^{**}p < .01$, $^{*}p < .05$

つぎに、③身体障害者に対するイメージとパラアスリートに対するイメージには乖離が存在するのかを検討するために、ぞれぞれの群ごとに対応のある *t* 検定を実施した。その結果、観戦群では、「社会的不利；$t\ (944) = 26.73$，$p < .01$」「尊敬；$t\ (944) = 26.51$，$p < .01$」「同情；$t\ (944) = 24.27$，$p < .01$」となり、身体障害者に対するイメージよりも、パラアスリートに対するイメージのほうが有意に高い値を示した。非観戦群では、「社会的不利；$t\ (1448) = 35.66$，$p < .01$」「尊敬；$t\ (1448) = 26.53$，$p < .01$」「同情；$t\ (1448) = 27.48$，$p < .01$」となり、身体障害者に対するイメージよりも、パラアスリートに対するイメージの得点が有意に高かった。以上のことから、いずれの群においても、身体障害者に対してよりもパラアスリートに対してポジティブなイメージを有していることが明らかとなった。

先行研究において、東京パラリンピックが、多様性や包摂的な社会に対する意識を高めるきっかけとなったことを示す結果が得られている（日本財団，2021）。身体障害者およびパラアスリートに対するイメージと身体障害者との交流態度の一部において、東京パラリンピックを観戦した者が、観戦しなかった者より良好な結果が得られた本研究は、この先行研究の知見を支持するものといえる。一方で、東京パラリンピックの観戦の有無と、「社会的不利」のイメージおよび「主張」に関する抵抗感との間に関連が認められなかったことは、共生社会の実現に向けて、どのような課題が残されているのかを提示するものである。また、本研究の結果から、身体障害者に対するイメージとパラアスリートに対するイメージが乖離しうることが示唆されたことは、

先行研究で懸念されてきたエリート・パラスポーツの功罪の一側面に関連するものであった。以上のことから、共生社会の推進に向けて、東京パラリンピックの観戦が身体障害者イメージや身体障害者に対する交流態度とどのようにポジティブに関連するのかを提示しただけでなく、パラアスリートが有する「スポーツを行う身体」によって、共生社会の推進に逆効果となる可能性にも言及した本研究は、東京パラリンピックの功罪を多面的に検討したという点において意義があるといえよう。

最後に、④高いパフォーマンス能力を呈示するパラアスリートに対してのイメージが、交流場面における態度にポジティブに関連するのかを検討するために、パス解析を実施した（図 1)。その結果、「交流の場での当惑」および「交友関係」に関する抵抗感では、身体障害者に対する 3 つのイメージとの間に、有意な負の関連が認められた。また、パラアスリートに対する「尊敬」および「同情」のイメージとの間に、有意な負の関連が認められた。一方、「主張」に関する抵抗感では、身体障害者に対する「社会的不利」および「同情」のイメージとの間に、有意な負の関連が認められたが、パラアスリートに対するイメージはいずれも関連しなかった。

さらに、パラアスリートに対する「社会的不利」のイメージは、いずれの交流態度とも関連しなかった。エリートレベルのパラアスリートにおいては、高いパフォーマンス能力に注意が向くことで「障害のある身体」が希薄になるとされる（Brett & Bundon, 2017)。これを踏まえれば、エリートレベルのパラアスリートが有する高いパフォーマンス能力に注意が向き、「障害のある身体」が希薄化することで彼ら・彼女らに対する「社会的不利」のイメージが良好になったとしても、スポーツをしない、あるいはできない者も含んだ身体障害者に対しては異質な存在としての認識が残り、交流態度の変化に結びつかない可能性が示唆された。

なお、本研究は横断的な検討のみであり、東京パラリンピックの観戦と測定した要因間の因果関係を示していないこと、および本研究の成果はあくまでも一部の身体障害者をめぐる問題に限定されていることなどは、本研究の限界であろう。

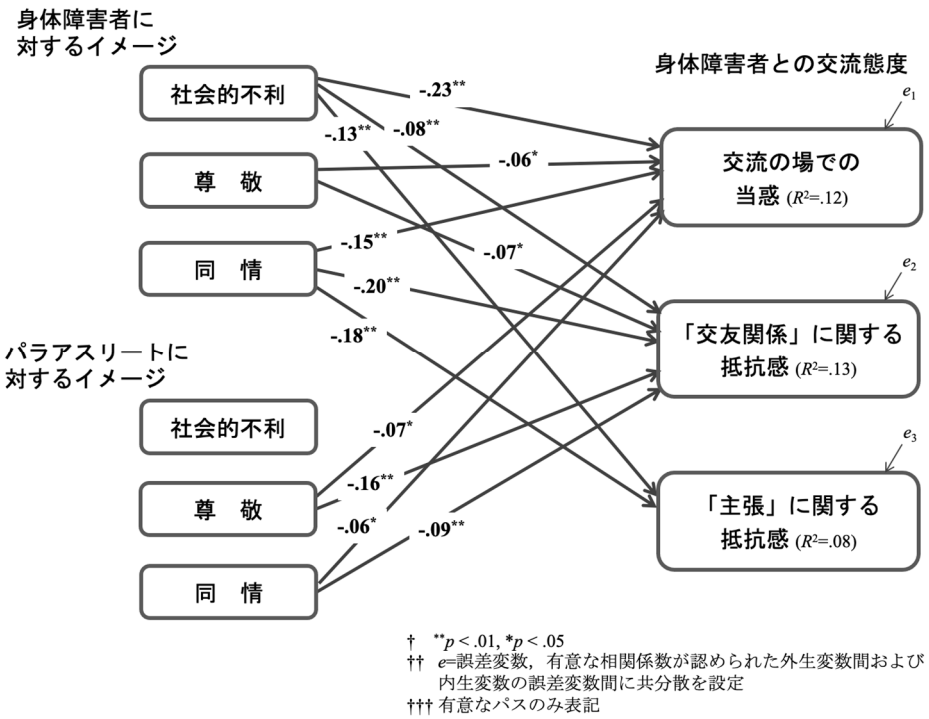

図 1．身体障害者およびパラアスリートに対するイメージと身体障害者との交流態度の関連

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 内田若希・安井友康・山本理人・小松智子	４．巻 21
２．論文標題 東京2020パラリンピック競技大会の観戦有無による身体障害者およびパラアスリートに対するイメージと交流態度の差異	５．発行年 2023年
３．雑誌名 アダプテッド・スポーツ科学	６．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 内田若希・安井友康・山本理人・小松智子	４．巻 45
２．論文標題 身体障害者およびパラアスリートに対するイメージは身体障害者との交流態度に関連するのか？	５．発行年 2023年
３．雑誌名 健康科学	６．最初と最後の頁 23-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 内田若希	４．巻 15
２．論文標題 競技志向の障害者：パラリンピアンに至るまでの心理的プロセス	５．発行年 2020年
３．雑誌名 臨床発達心理実践研究	６．最初と最後の頁 5-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 内田若希・安井友康・山本理人
２．発表標題 身体障害者およびパラアスリートに対する身体障害者イメージと交流態度の関連
３．学会等名 日本アダプテッド体育・スポーツ学会第27回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 内田 若希
２．発表標題 共生社会の実現への新たな視座を求めて
３．学会等名 日本スポーツ心理学会第48回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 内田 若希・安井 友康・山本 理人
２．発表標題 東京パラリンピックの観戦有無による障害者イメージおよび交流態度の差異の検討
３．学会等名 日本アダプテッド体育・スポーツ学会第26回大会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	安井　友康 (Yasui Tomoyasu)		
研究協力者	山本　理人 (Yamamoto Rihito)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関